

by Yoshifumi UEDA and Dennis HIROTA

**Kyoto: Hongwanji International Center, 1989.  
ALL RIGHTS RESERVED.**

- 「大無量寿經」言「設我得佛，十方衆生，乃至十念，若不生者，不取正覺。唯除五逆，誹謗正法」文

「大無量寿經言」といふは

- きたまへる經なり。「説我得仏」といふは、もしわれ  
徳を得だらんときといふ御ことばなり。「十方衆生」  
といふは、十方のよろづの衆生といふなり。「至心信  
樂」といふは、「至心」は眞実と申すなり、眞実と申  
すは如來の御ちかひの眞実なるを至心と申すなり。煩惱  
惱具足の衆生は、もとより眞実の心なし、清淨の心  
なし、濁惡邪見のゆゑなり。「信樂」といふは、如來  
の本願眞実にましますを、ふたごころなくふかく信じ  
て疑はざれば、信樂と申すなり。この「至心信樂」  
は、すなはち十方の衆生をして、わが眞実なる誓願  
を信樂すべしとすすめたまへる御ちかひの至心信樂

5 なり、凡夫自力のここにはあらず。「欲<sup>ゆ</sup>我國<sup>がくこく</sup>」といふは、他力<sup>たりき</sup>の至心信<sup>しつのん</sup>樂<sup>らく</sup>のころをもつて安樂<sup>あんらく</sup>淨土<sup>じやうど</sup>に生れんとおもへとなり。「乃至十念<sup>じそじゅうねん</sup>」と申すは、如<sup>ごとく</sup>來<sup>き</sup>のちかひの名号<sup>めいご</sup>をとなへんことをすすめたまふに、遍數<sup>へんすう</sup>の定<sup>のり</sup>まりなきほどをあらはし、時節<sup>じせき</sup>を定めざることを衆生<sup>しゆじやう</sup>にしらせんとおぼしめして、乃至<sup>じそ</sup>のみことを十念<sup>じゅうねん</sup>のみなにそへて誓<sup>ちかひ</sup>ひたまへるなり。如來<sup>ゆきらい</sup>より御<sup>ご</sup>ちかひをたまはりぬるには、尋常<sup>じふうちう</sup>の時節<sup>じせき</sup>をとりて臨終<sup>りんじゆ</sup>の称念<sup>じょうねん</sup>をまつべからず、ただ如來<sup>ゆきらい</sup>の至心信<sup>しつのん</sup>樂<sup>らく</sup>をふかくたのむべしとなり。この眞實<sup>しんじやく</sup>信心<sup>しんぎ</sup>をえんとき、攝取<sup>さくしゆ</sup>不捨<sup>ふしゆ</sup>の心光<sup>じんこう</sup>に入りぬれば、正定聚<sup>じゆうじゆ</sup>の位<sup>い</sup>に定まるとみえたり。「若<sup>わ</sup>不<sup>ふ</sup>生<sup>じゆう</sup>者<sup>しゃ</sup>不<sup>ふ</sup>取<sup>しゆ</sup>正<sup>じゆう</sup>覺<sup>かく</sup>」といふは、「若<sup>わ</sup>不<sup>ふ</sup>生<sup>じゆう</sup>者<sup>しゃ</sup>」はもし生れずはといふみことなり、「不<sup>ふ</sup>取<sup>しゆ</sup>正<sup>じゆう</sup>覺<sup>かく</sup>」は仏<sup>ぶつ</sup>に成<sup>な</sup>らじと誓<sup>ちかひ</sup>ひたまへるみのりなり。このころはすなはち至心信<sup>しつのん</sup>樂<sup>らく</sup>をえたるひと、わが淨土<sup>じやうど</sup>に

- もし生れずは仏に成らじと誓ひたまへる御のりなり。  
この本願のやうは「唯信抄」によくよくみえたり。  
「唯信」と申すは、すなはちこの眞實信をひとすぢ  
にとるこころを申すなり。「唯除五逆誹謗正法」とい  
ふは、「唯除」といふはただ除くといふことばなり。  
五逆のつみびとをきらひ、誹謗のおもきことがをしらせ  
んとなり。このふたつの罪のおもきことをしめして、  
上方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせんと  
なり。

2 「無量寿經」のなかに、あるいは「諸有衆生  
聞其名号 信心歡喜 乃至一念 至心回向 願生彼  
國 即得往生 住不退転」と説きたまへり。「諸有衆  
生」といふは、上方のよろづの衆生と申すこころな  
り。「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのた  
まへるなり。きくといふは、本願をききて、疑ふこころ

5 なり、凡夫自力のここにはあらず。「欲<sup>ゆ</sup>我國<sup>がくこく</sup>」といふは、他力<sup>たりき</sup>の至心信<sup>しつのん</sup>樂<sup>らく</sup>のころをもつて安樂<sup>あんらく</sup>淨土<sup>じょうど</sup>に生れんとおもへとなり。「乃至十念<sup>じそじゅうねん</sup>」と申すは、如<sup>ごとく</sup>來<sup>き</sup>のちかひの名号<sup>めいご</sup>をとなへんことをすすめたまふに、遍數<sup>へんすう</sup>の定<sup>のり</sup>まりなきほどをあらはし、時節<sup>じせき</sup>を定めざることを衆生<sup>しゆじやう</sup>にしらせんとおぼしめして、乃至<sup>じそ</sup>のみことを十念<sup>じゅうねん</sup>のみなにそへて誓<sup>ちかひ</sup>ひたまへるなり。如來<sup>ゆきらい</sup>より御<sup>ご</sup>ちかひをたまはりぬるには、尋常<sup>じふうちう</sup>の時節<sup>じせき</sup>をとりて臨終<sup>りんじゆ</sup>の称念<sup>じょうねん</sup>をまつべからず、ただ如來<sup>ゆきらい</sup>の至心信<sup>しつのん</sup>樂<sup>らく</sup>をふかくたのむべしとなり。この眞實<sup>しんじやく</sup>信心<sup>しんぎ</sup>をえんとき、攝取<sup>せつしゆ</sup>不捨<sup>ふしゆ</sup>の心光<sup>じんこう</sup>に入りぬれば、正定聚<sup>じゆうじゆ</sup>の位<sup>い</sup>に定まるとみえたり。「若<sup>わ</sup>不<sup>ふ</sup>生<sup>じゆう</sup>者<sup>しゃ</sup>不<sup>ふ</sup>取<sup>しゆう</sup>正<sup>じゆう</sup>覺<sup>かく</sup>」といふは、「若<sup>わ</sup>不<sup>ふ</sup>生<sup>じゆう</sup>者<sup>しゃ</sup>」はもし生れずはといふみことなり、「不<sup>ふ</sup>取<sup>しゆう</sup>正<sup>じゆう</sup>覺<sup>かく</sup>」は仏<sup>ぶつ</sup>に成<sup>な</sup>らじと誓<sup>ちかひ</sup>ひたまへるみのりなり。このころはすなはち至心信<sup>しつのん</sup>樂<sup>らく</sup>をえたるひと、わが淨土<sup>じょうど</sup>に

29. 28. 26. 27. 25. 24. 23. 22. 21. 20. 19. 18. 17. 16. 15. 14. 13.

り。「唯說弥陀本願海」と申すは、諸仏の世に出でた  
まふ本懷は、ひとへに弥陀の願海一乗のみのりを説  
かんとなり。しかれば『大經』には、「如來所以興  
出於世」欲拯群萌惠以真実之利」と説きたまへり。  
「如來所以興出於世」は、「如來」と申すは諸仏と申  
すなり、「所以」といふはゆゑといふみことなり、「興  
出於世」といふは世に仏出でたまふと申すみことな  
り。「欲拯群萌」は、「欲」といふはおぼしめすとな  
り、「拯」はすくはんとなり、「群萌」はよろづの衆  
生をすくはんとおぼしめすとなり。仏の世に出でた  
まふゆゑは、弥陀の御ちかひを説きてよろづの衆生  
をたすけすくはんとおぼしめすとするべし。「五濁惡  
時群生海應信如來如實言」といふは、「能發一念喜愛心」となり。「能發一念喜愛心」といふは、「能」はよくと

えたりといふ。真実信心をうれば、すなはち無碍光仏  
の御こころのうちに攝取して捨てたまはざるなり。攝  
はをさめたまふ、取はむかへると申すなり。をさめ  
とりたまふとき、すなはち、とき・日をもへだてず、  
正定聚の位につき定まるを「往生を得」とはのた  
まへるなり。

3 和朝愚禿釈親鸞「正信偈」文  
「本願名号正定業至心信樂願為因成等覺  
証大涅槃必至滅度願成就如來所以興出世唯  
說弥陀本願海五濁惡時群生海應信如來如實言  
能發一念喜愛心不斷煩惱得涅槃凡聖逆謗齊回

10. 19. 18. 17. 16. 15. 14. 13.

いふ、安樂國ををしへたまへるなり。「即得往生」と  
いふは、「即」はすなはちといふ、ときをへず、日を  
もへだてぬなり。また「即」はつくといふ、その位に  
定まりつくといふことばなり。「得」はうべきことを  
えたりといふ。真実信心をうれば、すなはち無碍光仏  
の御こころのうちに攝取して捨てたまはざるなり。攝  
はをさめたまふ、取はむかへると申すなり。をさめ  
とりたまふとき、すなはち、とき・日をもへだてず、  
正定聚の位につき定まるを「往生を得」とはのた  
まへるなり。

20. 19. 18. 17. 16. 15. 14. 13.

いふなり。「至心信樂願為因」といふは、弥陀如來回  
向の真実信心なり、この信心を阿彌陀菩薩の因とすべし  
となり。「成等覺証大涅槃」といふは、「成等覺」と  
いふは正定聚の位なり。この位を龍樹菩薩は「即時  
入必定」とのたまへり、曇鸞和尚は「入正定之數  
とをしへたまへり、これはすなはち弥勒の位」とひとし  
となり。「証大涅槃」と申すは、必至滅度の願成就  
のゆゑにかららず大般涅槃をさとるとして。「滅  
度」と申すは、大涅槃なり。「如來所以興出世」とい  
ふは、諸仏の世に出でたまゆゑはと申すみのりな

28. 26. 27. 25. 24. 23. 22. 21. 20. 19. 18. 17. 16. 15. 14. 13.

り。「唯說弥陀本願海」と申すは、諸仏の世に出でた  
まふ本懷は、ひとへに弥陀の願海一乗のみのりを説  
かんとなり。しかれば『大經』には、「如來所以興  
出於世」欲拯群萌惠以真実之利」と説きたまへり。  
「如來所以興出於世」は、「如來」と申すは諸仏と申  
すなり、「所以」といふはゆゑといふみことなり、「興  
出於世」といふは世に仏出でたまふと申すみことな  
り。「欲拯群萌」は、「欲」といふはおぼしめすとな  
り、「拯」はすくはんとなり、「群萌」はよろづの衆  
生をすくはんとおぼしめすとなり。仏の世に出でた  
まふゆゑは、弥陀の御ちかひを説きてよろづの衆生  
をたすけすくはんとおぼしめすとするべし。「五濁惡  
時群生海應信如來如實言」といふは、「能發一念喜愛心」となり。「能發一念喜愛心」といふは、「能」はよくと

35. 34. 33. 32. 31. 30. 29. 28. 27. 26. 25. 24. 23. 22. 21. 20. 19. 18. 17. 16. 15. 14. 13.

いふ、「発」はおこすといふ、ひらくといふ、「一念喜  
愛心」は一念慶喜の真実信心よくひらけ、かららず  
本願の実報土に生るとするべし。慶喜といふは信をえ  
てのちよろこぶこころをいふなり。「不斷煩惱得涅槃」  
といふは、「不斷煩惱」は煩惱をたちすてずしてとい  
ふ、「得涅槃」と申すは、無上大涅槃をさとるをうる  
とするべし。「凡聖逆謗齊回入」といふは、小聖  
凡夫・五逆・謗法・無戒・闡提みな回心して真実信心  
なるがごとしとたとへたるなり。これを「如衆水入  
海一味」といふなり。「攝取心光常照護」といふは、  
信心をえたる人をば、無碍光仏の心光つねに照らし護  
りたまゆゑに、無明の闇はれ、生死のながき夜すで  
に曉になりぬとするべしとなり。「已能雖破無明闇」  
といふは、このこころなり、信心をうれば曉になるが

9 まはぬときのみなをまうすなり。この如來の尊号は不可稱不可説不可思議にましますゆへに、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のち  
5 かひのみなり。この仏のみなはよろづの如來の名号にすぐれたまへり。これすなはち誓願なるがゆへなり。「甚分明」といふは、甚ははなはだといふ、すぐれたりといふこころなり。分はわかつといふ、よろづの衆生とわかつこころなり。明はあきらかなりといふ。十方一切衆生をことごとくわかつたすけみちび  
7 きたまふことあきらかなり。あはれみたまふことすぐれたまへりとなり。「十方世界普流行」といふは、「普」  
8 はあまねく、ひろく、きはなしといふ。「流行」は十方微塵世界にあまねくひろまりて仏教をすすめ行ぜしめたまふなり、しかばだじょうとよどく乗の聖人、小乗の聖人、善人、悪人、一切の凡夫、みなともに自力の智慧

4 まはぬときのみなをまうすなり。この如來の尊号は不可稱不可説不可思議にましますゆへに、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のち  
5 かひのみなり。この仏のみなはよろづの如來の名号にすぐれたまへり。これすなはち誓願なるがゆへなり。「甚分明」といふは、甚ははなはだといふ、すぐれたりといふこころなり。分はわかつといふ、よろづ

40 の衆生とわかつこころなり。明はあきらかなりといふ。十方一切衆生をことごとくわかつたすけみちび  
7 きたまふことあきらかなり。あはれみたまふことすぐれたまへりとなり。「十方世界普流行」といふは、「普」  
8 はあまねく、ひろく、きはなしといふ。「流行」は十方微塵世界にあまねくひろまりて仏教をすすめ行ぜしめたまふなり、しかばだじょうとよどく乗の聖人、小乗の聖人、善人、悪人、一切の凡夫、みなともに自力の智慧

36 いふは、われらが貪愛・瞋憎を雲・霧にたとへて、つねに信心の天に覆へるなりとするべし。「譬如日月覆雲霧雲霧之下明無闇」といふは、日月の、雲・霧に覆はるれども、闇はれて雲・霧の下あきらかなるがごとく、貪愛・瞋憎の雲・霧に信心は覆はるれども、往生にさはりあるべからずとするべしとなり。  
37 「獲信見敬得大慶」といふは、この信心をえておほきによろこびうやまふ人といふなり。「大慶」はおほきにうべきことをえてのちによろこぶといふなり。  
38 「即横超截五悪趣」といふは、信心をえつればすなはち横に五悪趣をきるなりとするべしとなり。「即横超」は、「即」はすなはちといふ、信をうる人はときをへず日をへだてずして正定聚の位に定まるを即といふなり、「横」はよこさまといふ、如來の願力なり、他

39 「即横超截五惡趣」といふは、信心をえつればすなはち横に五悪趣をきるなりとするべしとなり。「即横超」は、「即」はすなはちといふ、信をうる人はときをへず日をへだてずして正定聚の位に定まるを即といふなり、「横」はよこさまといふ、如來の願力なり、他

40 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 509 510 511 512 513 514 515 516 517 517 518 519 519 520 521 522 523 524 525 526 527 527 528 529 529 530 531 532 533 534 535 536 537 537 538 539 539 540 541 542 543 544 545 546 547 547 548 549 549 550 551 552 553 554 555 556 557 557 558 559 559 560 561 562 563 564 565 566 566 567 568 568 569 569 570 571 572 573 574 575 575 576 577 577 578 579 579 580 581 582 583 584 585 586 587 587 588 589 589 590 591 592 593 594 595 595 596 597 597 598 599 599 600 601 602 603 604 605 605 606 607 607 608 609 609 610 611 612 613 614 614 615 616 616 617 617 618 618 619 619 620 621 621 622 623 623 624 625 625 626 627 627 628 628 629 629 630 631 631 632 633 633 634 635 635 636 637 637 638 638 639 639 640 641 641 642 643 643 644 645 645 646 647 647 648 648 649 649 650 651 651 652 653 653 654 655 655 656 657 657 658 659 659 660 661 661 662 663 663 664 665 665 666 667 667 668 669 669 670 671 671 672 673 673 674 675 675 676 677 677 678 679 679 680 681 681 682 683 683 684 685 685 686 687 687 688 689 689 690 691 691 692 693 693 694 695 695 696 697 697 698 699 699 700 701 701 702 703 703 704 705 705 706 707 707 708 709 709 710 711 711 712 713 713 714 715 715 716 717 717 718 719 719 720 721 721 722 723 723 724 725 725 726 727 727 728 729 729 730 731 731 732 733 733 734 735 735 736 737 737 738 739 739 740 741 741 742 743 743 744 745 745 746 747 747 748 749 749 750 751 751 752 753 753 754 755 755 756 757 757 758 759 759 760 761 761 762 763 763 764 765 765 766 767 767 768 769 769 770 771 771 772 773 773 774 775 775 776 777 777 778 779 779 780 781 781 782 783 783 784 785 785 786 787 787 788 789 789 790 791 791 792 793 793 794 795 795 796 797 797 798 799 799 800 801 801 802 803 803 804 805 805 806 807 807 808 809 809 810 811 811 812 813 813 814 815 815 816 817 817 818 819 819 820 821 821 822 823 823 824 825 825 826 827 827 828 829 829 830 831 831 832 833 833 834 835 835 836 837 837 838 839 839 840 841 841 842 843 843 844 845 845 846 847 847 848 849 849 850 851 851 852 853 853 854 855 855 856 857 857 858 859 859 860 861 861 862 863 863 864 865 865 866 867 867 868 869 869 870 871 871 872 873 873 874 875 875 876 877 877 878 879 879 880 881 881 882 883 883 884 885 885 886 887 887 888 889 889 890 891 891 892 893 893 894 895 895 896 897 897 898 899 899 900 901 901 902 903 903 904 905 905 906 907 907 908 909 909 910 911 911 912 913 913 914 915 915 916 917 917 918 919 919 920 921 921 922 923 923 924 925 925 926 927 927 928 929 929 930 931 931 932 933 933 934 935 935 936 937 937 938 939 939 940 941 941 942 943 943 944 945 945 946 947 947 948 949 949 950 951 951 952 953 953 954 955 955 956 957 957 958 959 959 960 961 961 962 963 963 964 965 965 966 967 967 968 969 969 970 971 971 972 973 973 974 975 975 976 977 977 978 979 979 980 981 981 982 983 983 984 985 985 986 987 987 988 989 989 990 991 991 992 993 993 994 995 995 996 997 997 998 999 999 1000 1000 1001 1001 1002 1002 1003 1003 1004 1004 1005 1005 1006 1006 1007 1007 1008 1008 1009 1009 1010 1010 1011 1011 1012 1012 1013 1013 1014 1014 1015 1015 1016 1016 1017 1017 1018 1018 1019 1019 1020 1020 1021 1021 1022 1022 1023 1023 1024 1024 1025 1025 1026 1026 1027 1027 1028 1028 1029 1029 1030 1030 1031 1031 1032 1032 1033 1033 1034 1034 1035 1035 1036 1036 1037 1037 1038 1038 1039 1039 1040 1040 1041 1041 1042 1042 1043 1043 1044 1044 1045 1045 1046 1046 1047 1047 1048 1048 1049 1049 1050 1050 1051 1051 1052 1052 1053 1053 1054 1054 1055 1055 1056 1056 1057 1057 1058 1058 1059 1059 1060 1060 1061 1061 1062 1062 1063 1063 1064 1064 1065 1065 1066 1066 1067 1067 1068 1068 1069 1069 1070 1070 1071 1071 1072 1072 1073 1073 1074 1074 1075 1075 1076 1076 1077 1077 1078 1078 1079 1079 1080 1080 1081 1081 1082 1082 1083 1083 1084 1084 1085 1085 1086 1086 1087 1087 1088 1088 1089 1089 1090 1090 1091 1091 1092 1092 1093 1093 1094 1094 1095 1095 1096 1096 1097 1097 1098 1098 1099 1099 1100 1100 1101 1101 1102 1102 1103 1103 1104 1104 1105 1105 1106 1106 1107 1107 1108 1108 1109 1109 1110 1110 1111 1111 1112 1112 1113 1113 1114 1114 1115 1115 1116 1116 1117 1117 1118 1118 1119 1119 1120 1120 1121 1121 1122 1122 1123 1123 1124 1124 1125 1125 1126 1126 1127 1127 1128 1128 1129 1129 1130 1130 1131 1131 1132 1132 1133 1133 1134 1134 1135 1135 1136 1136 1137 1137 1138 1138 1139 1139 1140 1140 1141 1141 1142 1142 1143 1143 1144 1144 1145 1145 1146 1146 1147 1147 1148 1148 1149 1149 1150 1150 1151 1151 1152 1152 1153 1153 1154 1154 1155 1155 1156 1156 1157 1157 1158 1158 1159 1159 1160 1160 1161 1161 1162 1162 1163 1163 1164 1164 1165 1165 1166 1166 1167 1167 1168 1168 1169 1169 1170 1170 1171 1171 1172 1172 1173 1173 1174 1174 1175 1175 1176 1176 1177 1177 1178 1178 1179 1179 1180 1180 1181 1181 1182 1182 1183 1183 1184 1184 1185 1185 1186 1186 1187 1187 1188 1188 1189 1189 1190 1190 1191 1191 1192 1192 1193 1193 1194 1194 1195 1195 1196 1196 1197 1197 1198 1198 1199 1199 1200 1200 1201 1201 1202 1202 1203 1203 1204 1204 1205 1205 1206 1206 1207 1207 1208 1208 1209 1209 1210 1210 1211 1211 1212 1212 1213 1213 1214 1214 1215 1215 1216 1216 1217 1217 1218 1218 1219 1219 1220 1220 1221 1221 1222 1222 1223 1223 1224 1224 1225 1225 1226 1226 1227 1227 1228 1228 1229 1229 1230 1230 1231 1231 1232 1232 1233 1233 1234 1234 1235 1235 1236 1236 1237 1237 1238 1238 1239 1239 1240 1240 1241 1241 1242 1242 1243 1243 1244 1244 1245 1245 1246 1246 1247 1247 1248 1248 1249 1249 1250 1250 1251 1251 1252 1252 1253 1253 1254 1254 1255 1255 1256 1256 1257 1257 1258 1258 1259 1259 1260 1260 1261 1261 1262 1262 1263 1263 1264 1264 1265 1265 1266 1266 1267 1267 1268 1268 1269 1269 1270 1270 1271 1271 1272 1272 1273 1273 1274 1274 1275 1275 1276 1276 1277 1277 1278 1278 1279 1279 1280 1280 1281 1281 1282 1282 1283 1283 1284 1284 1285 1285 1286 1286 1287 1287 1288 1288 1289 1289 1290 1290 1291 1291 1292 1292 1293 1293 1294 1294 1295 1295 1296 1296 1297 1297 1298 1298 1299 1299 1300 1300 1301 1301 1302 1302 1303 1303 1304 1304 1305 1305 1306 1306 1307 1307 1308 1308 1309 1309 1310 1310 1311 1311 1312 1312 1313 1313 1314 1314 1315 1315 1316 1316 1317 1317 1318 1318 1319 1319 1320 1320 1321 1321 1322 1322 1323 1323 1324 1324 1325 1325 1326 1326 1327 1327 1328 1328 1329 1329 1330 1330 1331 1331 1332 1332 1333 1333 1334 1334 1335 1335 1336 1336 1337 1337 1338 1338 1339 1339 1340 1340 1341 1341 1342 1342 1343 1343 1344 1344 1345 1345 1346 1346 1347 1347 1348 1348 1349 1349 1350 1350 1351 1351 1352 1352 1353 1353 1354 1354 1355 1355 1356 1356 1357 1357 1358 1358 1359 1359 1360 1360 1361 1361 1362 1362 1363 1363 1364 1364 1365 1365 1366 1366 1367 1367 1368 1368 1369 1369 1370 1370 1371 1371 1372 1372 1373 1373 1374 1374 1375 1375 1376 1376 1377 1377 1378 1378 1379 1379 1380 1380 1381 1381 1382 1382 1383 1383 1384 1384 1385 1385 1386 1386 1387 1387 1388 1388 1389 1389 1390 1390 1391 1391 1392 1392 1393 1393 1394 1394 1395 1395 1396 1396 1397 1397 1398 1398 1399 1399 1400 1400 1401 1401 1402 1402 1403 1403 1404 1404 1405 1405 1406 1406 1407 1407 1408 1408 1409 1409 1410 1410 1411 1411 1412 1412 1413 1413 1414 1414 1415 1415 1416 1416 1417 1417 1418 1418 1419 1419 1420 1420 1421 1421 1422 1422 1423 1423 1424 1424 1425 1425 1426 1426 1427 1427 1428 1428 1429 1429 1430 1430 1431 1431 1432 1432 1433 1433 1434 1434 1435 1435 1436 1436 1437 1437 1438 1438 1439 1439 1440 1440 1441 1441 1442 1442 1443 1443 1444 1444 1445 1445 1446 1446 1447 1447 1448 1448 1449 1449 1450 1450 1451 1451 1452 1452 1453 1453 1454 1454 1455 1455 1456 1456 1457 1457 1458 1458 1459 1459 1460 1460 1461 1461 1462 1462 1463 1463 1464 1464 1465 1465 1466 1466 1467 1467 1468 1468 1469 1469 1470 1470 1471 1471 1472 1472 1473 1473 1474 1474 1475 1475 1476 1476 1477 1477 1478 1478 1479 1479 1480 1480 1481 1481 1482 1482 1483 1483 1484 1484 1485 1485 1486 1486 1487 1487 1488 1488 1489 1489 1490 1490 1491 1491 1492 1492 1493 1493 1494 1494 1495 1495 1496 1496 1497 1497 1498 1498 1499 1499 1500 1500 1501 1501 1502 1502 1503 1503 1504 1504 1

と申せば、信と行とふたつときけども、行をひとごゑするとききて、疑はねば、行をはなれたる信はなしとききて候ふ。また、信はなれたる行なしとおぼしめすべし。

(b) 誓願・名号と申してかはりたること候はず。

これみな弥陀の御ちかひと申することをこころうべし。行と信とは御ちかひを申すなり。

誓願をはなれたる名号も候はず、名号をはなれたる誓願も候はず候ふ。かく申し候ふも、はからひにて候ふなり。ただ誓願を不思議と信じ、また名号を不思議と一念信じとなへつるうへは、なんであわがはからひをいたすべき。ききわけ、しりわくるなどわづらはしくは仰せられ候ふやらん。これみなひがことてはるふなり。ただ不思議と信じつるうへは、とかく御はからひあるべからず候ふ。往生の業には、わたく

と申せば、信と行とふたつときけども、行をひとごゑするとききて、疑はねば、行をはなれたる信はなしとききて候ふ。また、信はなれたる行なしとおぼしめすべし。

しのはからひはあるまじく候ふなり。あなかしこ、あなかしこ。

15 ただ如来にまかせまゐらせおはしますべく候ふ。

7 「彼仏因中立弘誓、聞名念我總迎來、  
不簡貧窮將富貴、不簡下智與高才、  
但使回心多念佛、能令瓦礫變成金」

(五会法事讚)

をひらかしむるなり。

5 それ淨土真宗のこころは、往生の根機に他力あり、自力あり。このことすでに天竺の論家、淨土の祖師の仰せられたることなり。

3 まづ自力と申すことは、行者のおののおのの縁にしたがひて余の仏号を称念し、余の善根を修行してわが身をたのみ、わがはからひのところをもつて身・口・意のみだれごころをつくろひ、めでたうしなして淨土へ往生せんとおもふを自力と申すなり。また他力と申すことは、弥陀如来の御ちかひのなかに、選択攝取したまへる第十八の念佛往生の本願を信楽するを他力と申すなり。如來の御ちかひなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人の仰せごとにてありき。義といふことは、はからふことばなり。行者はからひは自力なれば義といふなり。他力は本願を信楽

して往生必定なるゆゑに、さらに義なしとなり。

9 しかれば、わが身のわるければ、いかでか如來迎へたまはんとおもふべからず、凡夫はもとより煩惱具足御はからひにては眞実の報土へ生るべからざるなり。「行者のおののおのの自力の信にては、懈慢・邊地の往生、胎生・疑城の淨土までぞ往生せらるることにてころよければ往生すべしとおもふべからず、自力の御はからひにては眞実の報土へ生るべからざるなり。

10 たまはんとおもふべからず、凡夫はもとより煩惱具足したるゆゑに、わるきものとおもふべし。またわがころよければ往生すべしとおもふべからず、自力の御はからひにては眞実の報土へ生るべからざるなり。

11 ころよければ往生すべしとおもふべからず、自力の御はからひにては眞実の報土へ生るべからざるなり。

12 ころよければ往生すべしとおもふべからず、自力の御はからひにては眞実の報土へ生るべからざるなり。

13 「行者のおののおのの自力の信にては、懈慢・邊地の往生、胎生・疑城の淨土までぞ往生せらるることにてあるべき」とぞ、うけたまはりたりし。

6 (a) 信の一念・行の一念ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。そのゆゑは、行と申すは、本願の名号をひとこゑとなへて往生すと申すことをききて、ひとこゑをもとなへ、もしは十念をもせんは行なり。この御ちかひをききて、疑ふこころのすこしもなきを信の一念

1 「不簡破戒罪根深」といふは、「破戒」はかみにあらはすところのよろづの道俗の戒品をうけてやぶりしてたるもの、これらをきらはずとなり。「罪根深」といふは、十惡・五逆の悪人、謗法闡提の罪人、おほよそ善根すくなきもの、悪業おほきもの、善心あさきもの、恶心あかきもの、かやうのあさましきさまざまのつみふかき人を深といふ、ふかしといふことばなり。

19 はよくといふ、「命」はせしむといふ、「瓦」はかはらといふ、「礫」はつぶてといふ。「变成金」は、变成はかへなすといふ、金はこがねといふ。如來の本願を信すれば、かはら・つぶてのことくなるわれらを、こがねにかへなさしむとたとへたまへるなり。あきびと・猶師などは、いし・かはら・つぶてのことくなるを、如來の攝取のひかりにおさめとりたまふてすてたまはず、これひとへにまことの信心のゆへなればなりとしるべし。攝取のひかりとまうすは、無碍光仏の御心ここるのうちにおさめとりたまゆへに金剛の信心とまうすなり。

(\*異本) れうし・あき人さまざまのものは、みないし・かわら・つぶてのことくなるわれらなり。如來の御ちかひをふたごころなく信樂すれば、攝取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまふは、すなわちれうし・あき人などは、いし・かわら・つぶてなむ

はよくといふ、「命」はせしむといふ、「瓦」はかはらといふ、「礫」はつぶてといふ。「變成金」は、变成はかへなすといふ、金はこがねといふ。如來の本願を

どを、よくこがねとなさしめむがごとしどたとへたまへるなり。

8 「自来迎」といふは、自はみづからといふ、弥陀、無数の化仏、無数の化觀世音・化大勢至等の無量無数の聖衆、みづからつねにときをきらはず、ところを

へだてず、眞実信心をえたる人にそひたまひてまもりたまゆへにみづからとまうすなり。また「自」はをのづからといふ、をのづからといふは自然といふ、自然といふはしからしむといふ、しからしむといふは、行者のはじめてともかくもはからはざるに、過去・今生・未來の一切のつみを善に転じかへなすといふなり。転ずといふは、つみをけしうしなはずして善になすなり、よろづのみづ大海にいればすなはちうしななるがごとし。(\*異本) 弥陀の願力を信するがゆへに、如來の功德をえしむるがゆへに、しからしむといふ。はじ

3 すべて、よきひと、あしきひと、たふときひと、いやしき人を無碍光仏の御ちかひにはえらばず、これをみちびきたまふをさきとしむねとするなり。眞実信心をうれば実報土にむまとをしへたまへるを淨土真宗とすとするべし。総迎來といふは、すべてみな眞実信樂あるものを淨土へむかへてかへらしむとなり。

4 「但使回心多念佛」といふは、「但使回心」は、ひとへに回心せしめよといふこころなり、回心といふは、自力の心をひるがへしつるをいふなり。實報土にむまる人はかならず無碍光仏の心中におさめとりたまふゆへに金剛の信心となるなり。このゆへに「多念佛」とまうすなり。多は大のこころなり、勝のこころなり、増上上のこころなり。大はおほきなり、勝はすぐれたり、よろづの善にまさりとしるべし、増上は9 よろづの善にすぐれたるなり。これすなはち他力本願

10 無上のゆへなり。自力のこころをすつといふは、やうやうさまざまの大・小の聖人、善惡の凡夫の、みづからが身をよしとおもふこころをして、身をたのまず、あしきこころをさかしくかへりみず、また人をよしあしとおもふこころをして、ひとすぢに具縛の凡夫、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の誓願、広大智慧の名号を信楽すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。具縛といふはよろづの煩惱にしばられたるわれらなり。煩は身をわづらはす、惱はこころをほふるもの、これは猶師といふものなり。沽はよろづなやますといふ。屠はよろづのいきたるものをころしたるわれらなり。煩は身をわづらはす、惱はこころを11 ほふるもの、これは猶師といふものなり。沽はよろづ12 なやますといふ。屠は身をわづらはす、惱はこころを13 ほふるもの、これは猶師といふものなり。沽はよろづ14 のものをうりかふものなり、これはあきびと。これ15 らを下類といふなり。かやうのあきびと、猶師、さまざまのものは、みないし・かはら・つぶてのことくな16 るわれらなり。「能令瓦礫变成金」といふは、「能

- 6 めて功德をえんとはからはざれば自然といふなり。誓<sup>せ</sup>  
願<sup>がんしんじつ</sup>の信心<sup>しんじん</sup>をえたるひとは、攝取不捨<sup>せつしゆふしゃ</sup>の御<sup>おん</sup>ちかひに  
おさめとりてまもらせたまふによりて、行人<sup>ぎょうじん</sup>のはか  
らひにあらず、金剛<sup>こんごう</sup>の信心<sup>しんじん</sup>となるゆへに正定聚<sup>しょうじょうじようじゅ</sup>のく  
らゐに住すといふ。このころなれば憶念<sup>おくねん</sup>の心<sup>しん</sup>自然に  
おこるなり。この信心<sup>しんじん</sup>のおこることも、釈迦<sup>しゃか</sup>の慈父<sup>じし</sup>、  
弥陀<sup>みだ</sup>の悲母<sup>ひも</sup>の方便<sup>ほうべん</sup>によりて無上の信心<sup>しんじん</sup>を發起<sup>はつき</sup>せしめた  
まふとみえたり。これ自然の利益<sup>りやく</sup>なりとするべし。
- 7 8 9 10
- (\*異本) もとめざるに一切の功德善根<sup>くどうぜんこん</sup>を仏<sup>ぶつ</sup>のちか  
ひを信する人にえしむるがゆへにしからしむとい  
ふ。
- 9 「致使凡夫<sup>ぢしょほん</sup>念即生<sup>ねんそくじょうじゅ</sup>」といふは、「致<sup>ち</sup>」はむねとす  
といふ、むねとすといふはこれを本とすといふことば  
なり、いたるといふ、いたるといふは実報士<sup>じよほうしおと</sup>にいたる  
となり、「使<sup>し</sup>」はせしむといふ、「凡夫<sup>ぼんぶ</sup>」はすなはちわ
- 2 3 4 5 6 7 8 9 10
- は、無明煩惱<sup>むみょうぱんのう</sup>われらが身<sup>み</sup>にみちみちて、欲<sup>よく</sup>もおほく、  
いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおほくひま  
なくして、臨終<sup>りんじゆう</sup>の一念<sup>いちなん</sup>にいたるまでとどまらず、き  
えず、たえずと、水火<sup>すいか</sup>二河<sup>にが</sup>のたとへにあらはれたり。  
かかるあさましきわれら、願力<sup>がんりき</sup>の白道<sup>びやくどう</sup>を一分<sup>いぶん</sup>二分<sup>にぶん</sup>や  
うやうづつあゆみゆけば、無碍光<sup>むげこう</sup>仮<sup>け</sup>のひかりの御<sup>おん</sup>ここ  
ろにをさめとりたまふがゆゑに、かならず安樂淨土  
へいたらば、弥陀<sup>みだ</sup>如來<sup>じょらい</sup>とおなじく、かの正覺<sup>じょうがく</sup>の華<sup>はな</sup>に  
化生<sup>けじょう</sup>して大般涅槃<sup>だいはんねはん</sup>のさとりをひらかしむるをむねとせ  
なり。二河<sup>にが</sup>のたとへに、「一分<sup>いぶん</sup>二分<sup>にぶん</sup>ゆく」といふは、  
一年<sup>いっせん</sup>二年<sup>にねん</sup>すぎゆくにたとへたるなり。諸<sup>しよ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>出世<sup>しゆせい</sup>の直<sup>じき</sup>  
説<sup>せつ</sup>、如來成道<sup>じょらいじょうどう</sup>の素懷<sup>そがい</sup>は、凡夫<sup>ぼんぶ</sup>は弥陀<sup>みだ</sup>の本願<sup>ほんがん</sup>を念<sup>ねん</sup>ぜし  
めて即<sup>そく</sup>生<sup>しよう</sup>するをむねとすべしとなり。
- 10 「其有得聞彼<sup>かれ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>名号<sup>めいごう</sup>」といふは、本願<sup>ほんがん</sup>の名号<sup>めいごう</sup>を  
れなり、本願<sup>ほんがん</sup>力を信<sup>しん</sup>業<sup>ぎょう</sup>するをむねとすべしとなり。
- 3 「念<sup>ねん</sup>」は如來<sup>じょらい</sup>の御<sup>おん</sup>ちかひをあたごころなく信<sup>しん</sup>するをい  
ふなり、「即<sup>そく</sup>」はすなはちといふ、ときをへず、日<sup>ひ</sup>を  
へだてず、正定聚<sup>しょうじょうじゅ</sup>の位<sup>くら</sup>に定まるを「即生<sup>じよせい</sup>」といふな  
り、「生<sup>じよ</sup>」はうまるといふ、これを「念即生<sup>ねんそくじょうじゅ</sup>」と申す  
なり。また「即<sup>そく</sup>」はつくといふ、つくといふは位<sup>くら</sup>にか  
らば、これを東宮<sup>とうぐう</sup>の位<sup>くら</sup>にあるひとはかならず王<sup>おう</sup>の  
位<sup>くら</sup>につくがごとく、正定聚<sup>しょうじょうじゅ</sup>の位<sup>くら</sup>につくは東宮<sup>とうぐう</sup>の位<sup>くら</sup>  
ごとし、王<sup>おう</sup>にのぼるは即位<sup>そくい</sup>といふ、これはすなはち無<sup>む</sup>  
るといふ、これを東宮<sup>とうぐう</sup>の位<sup>くら</sup>に申すなり。信心<sup>しんじん</sup>のひとは正定聚<sup>しょうじょうじゅ</sup>  
にいたるを申すなり。信心<sup>しんじん</sup>のひとは正定聚<sup>しょうじょうじゅ</sup>にいたりて、かならず滅度<sup>めつど</sup>に至<sup>いた</sup>ると誓<sup>ちかひ</sup>たまへるな  
り。これを「致<sup>ち</sup>」とすといふ、むねとすと申すは涅槃<sup>ねはん</sup>  
のさとりをひらくをむねとすとなり。「凡夫<sup>ぼんぶ</sup>」といふ

16 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
 力真宗の本意なり。「截」といふはきるといふ、五惡  
 趣のきづなをよこさまにきるなり。「悪趣自然閉」と  
 いふは、願力に帰命すれば五道生死をとづるゆゑに  
 自然閉といふ、「閉」はとづといふなり。本願の業因  
 にひかれて自然に生るるなり。「昇道無窮極」といふ  
 は、「昇」はのぼるといふ、のぼるといふは無上涅槃  
 にいたる、これを昇といふなり。「道」は大涅槃道な  
 り。「無窮極」といふはきはまりなしとなり。「易往而  
 無人」といふは、「易往」はゆきやすしとなり、本願  
 力に乗すれば本願の実報土に生ること疑なければ、  
 ゆきやすきなり。「無人」といふはひとなしといふ、  
 ひとなしといふは眞実信心の人はありがたきゆゑに実報  
 土に生るる人まれなりとなり。しかれば源信和尚は、  
 「報土に生るる人はおほかからず、化土に生るる人はす  
 くなからず」とのたまへり。「其國不逆違自然之所奉」

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
 といふは、「其國」はそのくにといふ、すなはち安養  
 浄利なり。「不逆違」はさかさまならずといふ、たが  
 はずといふなり。「逆」はさかさまといふ、「違」はた  
 がふといふなり。眞実信をえたる人は大願業力のゆゑ  
 に、自然に浄土の業因たがはずして、かの業力にひか  
 るるゆゑにゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきは  
 まりなしとのたまへるなり。しかれば「自然之所奉」  
 と申すなり。他力の至心信樂の業因の自然にひくな  
 り。これを「奉」といふなり。「自然」といふは行者  
 のはからひにあらずとなり。

12 来迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆゑ  
 に。臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべ  
 し、いまだ眞実の信心をえざるがゆゑなり。また十  
 惡・五逆の罪人のはじめて善知識にあうて、すすめら  
 るるときにいふことなり。眞実信心の行人は、撰取

16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
 の本願を信じて一念するに、かならずもとめざるに無  
 上の功德を得しめ、しらざるに広大の利益を得るな  
 り。自然にさまざまのさとりをするはちひらく法則な  
 り。法則といふは、はじめて行者はからひにあら  
 ず、もとより不可思議の利益にあづかること、自然の  
 ありまと申すことをしらしむるを法則とはいふな  
 り、一念信心をうるひとのありさまの自然なることを  
 あらはすを法則とは申すなり。

\* (注) 為得大利 「ほとけになるべき利益をうる  
 なりとするべしとなり」(左訓)  
 \*\* (注) 法則 「ことのさだまりたるありさまとい  
 ふところなり」(左訓)

11 又言 「必得超絶去 往生安養国 橫截五惡  
 趣 惡趣自然閉 昇道無窮極 易往而無人 其國不  
 逆違 自然之所奉」(大經)抄出

1 「心得超絶去往生安養國」といふは、「必」はか  
 1 「心得超絶去往生安養國」といふは、「去」はすつといふ、ゆくといふ、さると  
 いふなり。「去」はすつといふ、ゆくといふ、さると  
 いふなり。「安養」といふは弥陀をほめたてまつるみ  
 なれゆきざるといふなり。安養淨土なり。「横截五惡  
 (注) 為得大利 「ほとけになるべき利益をうる  
 なりとするべしとなり」(左訓)  
 \*\* (注) 法則 「ことのさだまりたるありさまとい  
 ふところなり」(左訓)

7 6 5 4 3 2 1  
 こととみえたり、すなはち安樂淨土なり。「横截五惡  
 趣 惡趣自然閉」といふは、「横」はよこさまといふ、  
 よこさまといふは如來の願力を信ずるゆゑに行者の  
 はからひにあらず、五惡趣を自然にたちすて四生をは  
 なるるを横といふ、他力と申すなり、これを横超と  
 いふなり。横は堅に対することばなり、超は迂に対す  
 ることばなり、堅はたたさま、迂はめぐるとなり、堅  
 と迂とは自力聖道のこころなり、横超はすなはち他

ならずといふ、かならずといふは定まりぬといふここ  
 ろなり、また自然といふこころなり。「得」はえたり  
 といふ。「超」はこえてといふ。「絶」はたちすてはな  
 るといふ。「去」はすつといふ、ゆくといふ、さると  
 いふなり。娑婆世界をたちすてて流転生死をこえは  
 なれゆきざるといふなり。安養淨土に往生をうべ  
 しとなり。「安養」といふは弥陀をほめたてまつるみ  
 なれゆきざるといふなり。安養淨土なり。「横截五惡  
 趣 惡趣自然閉」といふは、「横」はよこさまといふ、  
 よこさまといふは如來の願力を信ずるゆゑに行者の  
 はからひにあらず、五惡趣を自然にたちすて四生をは  
 なるるを横といふ、他力と申すなり、これを横超と  
 いふなり。横は堅に対することばなり、超は迂に対す  
 ることばなり、堅はたたさま、迂はめぐるとなり、堅  
 と迂とは自力聖道のこころなり、横超はすなはち他

本願念佛の衆生には、影の形に添へるがごとくして  
はなれたまはず」とあかせり。しかれば、この信人の  
人を釈迦如来は、「わが親しき友なり」とよろこびま  
します。この信心の人を眞の仏弟子といへり。この人を  
を正念に住する人とす。この人は、攝取して捨てた  
まはざれば、金剛心をえたる人と申すなり。この人を  
「上上人とも、好人とも、妙好人とも、最勝人と  
も、希有人とも申す」なり。この人は正定聚の位に  
定まれるなりとするべし。しかれば弥勒仏とひとしき  
ひととのたまへり。これは眞実信心をえたるゆゑにかな  
らず眞実の報土に往生するなりとするべし。  
この信心をうることは、釈迦・弥陀・十方諸仏の御  
方便よりたまはりたるとするべし。しかれば、「諸仏  
の御をしへをそることなし、余の善根を行ずる人を  
することなし。この念佛する人にくみそしる人を

不捨のゆゑに正定聚の位に住す。このゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり。来迎の儀則をまたず。

正念といふは、本弘誓願の信楽定まるをいふなり。この信心うるゆゑに、かららず無上涅槃にいたるなり。この信心を一心といふ、この一心を金剛心といふ、この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち他力のなかの他力なり。

また正念といふにつきて二つあり。一つには定心の行人の正念、二つには散心の行人の正念あるべし。この二つの正念は他力のなかの自力の正念なり。

定散の善は諸行往生のことばにをさまるなり。この善は他力のなかの自力の善なり。この自力の行人は、来迎をまたずしては、辺地・胎生・懈慢界までも生るべからず。このゆゑに第十九の誓願に、「もろ

15  
3 2 13 (a) 13 (b)

もうの善をして淨土に向して往生せんとねがふ人の臨終には、われ現じて迎へん」と誓ひたまへり。  
臨終まつことと來迎往生といふことは、この定心・  
散心の行者のいふことなり。

13 (a) まことの信心をえたる人は、すでに仏に成らせたまふべき御身となりておはしますゆゑに、「如來」とひとしき人と經に説かれ候ふなり。弥勒は、まだ仏に成りたまふべきによりて、弥勒をばすでに弥勒仏と申し候ふなり。その定に、眞実信心をえたる人をば、

も、にくみそることあるべからず。あはれみをなし、かなしむころをもつべし」とこそ、聖人は仰せることありしか。あなかしこ、あなかしこ。

14 聖教のをしへをもみずしらぬ、おののおののやうにおはしますひとびとは、往生にさはりなしとばかりいふをききて、あしがまに御こころえること、おほく候ひき。いまもさこそ候ふらめとおぼえ候ふ。淨土の教もしらぬ信見房などが申すことによりて、ひがさまにいよいよなりあはせたまひ候ふらんをきき候ふこそあさましく候ふ。

まづおののおのの、むかしは弥陀みだのちかひをもしら  
ず、阿弥陀あみだ仏ぶつをも申もうさずおはしまし候そまつひしが、釈迦しゃか・  
弥陀みだの御方便ごほうべんにもよほされて、いま弥陀みだのちかひをも  
ききはじめておはします身みにて候そまつふなり。もとは無む  
明みょうの酒さけに酔ゑひて、貪欲とんよく・瞋恚しんに・愚痴ぐちの三毒さんどくをのみ好この

みめしあうて候ひつるに、仏のちかひをききはじめし  
より、無明の醉ひもやうやうすこしつさめ、三毒を  
もすこしつ好みして、阿弥陀仏の薬をつねに好み  
めす身となりておはしましあうて候ふぞかし。  
しかるになほ醉ひもさめやらぬに、かさねて醉ひを  
すすめ、毒も消えやらぬになほ毒をすすめられ候ふら  
んこそ、あさましく候へ。煩惱具足の身なればとて、  
こころにまかせて、身にもすまじきことをもゆるし、  
くにもいふまじきことをもゆるし、こころにもおもふ  
まじきことをもゆるして、いかにもこころのままにて  
あるべしと申しあうて候ふらんこそ、かへすがへす不  
便におぼえ候へ。醉ひもさめさきになほ酒をすす  
め、毒も消えやらぬに、いよいよ毒をすすめんがごと  
し。薬あり、毒を好めと候ふらんことは、あるべくも  
9 候はずとぞおぼえ候ふ。仏の御名をもきき念佛を申  
往生故名攝生増上縁文

1 しあはせたまはばこそ、世をいとふしるしにても候は  
め。また往生の信心は、祝迦・弥陀の御すすめによ  
りておこるとこそみえて候へば、さりともまことのこ  
ころおこらせたまひなんには、いかがむかしの御ここ  
ろのままにては候ふべき。

12 15 又曰、「言攝生増上縁者」如無量寿經四十八  
願中説「仏言若我成仏十方衆生願生我國  
稱我名字下至十聲乘我願力若不生者不取  
正覺此即是願往生行人命欲終時願力攝得  
往生故名攝生増上縁」文

「言攝生増上縁者」といふは、「攝生」は十方衆

生を誓願にをさめとらせたまふと申すこころなり。

「如無量壽經四十八願中説」といふは、如來の本願

を説きたまへる釈迦の御のりなりとしるべしとなり。  
「若我成仏」と申すは、法藏菩薩誓ひたまはくもし

みめしあうて候ひつるに、仏のちかひをききはじめし  
より、無明の醉ひもやうやうすこしつさめ、三毒を  
もすこしつ好みして、阿弥陀仏の薬をつねに好み  
めす身となりておはしましあうて候ふぞかし。  
しかるになほ醉ひもさめやらぬに、かさねて醉ひを  
すすめ、毒も消えやらぬになほ毒をすすめられ候ふら  
んこそ、あさましく候へ。煩惱具足の身なればとて、  
こころにまかせて、身にもすまじきことをもゆるし、  
くにもいふまじきことをもゆるし、こころにもおもふ  
まじきことをもゆるして、いかにもこころのままにて  
あるべしと申しあうて候ふらんこそ、かへすがへす不  
便におぼえ候へ。醉ひもさめさきになほ酒をすす  
め、毒も消えやらぬに、いよいよ毒をすすめんがごと  
し。薬あり、毒を好めと候ふらんことは、あるべくも  
9 候はずとぞおぼえ候ふ。仏の御名をもきき念佛を申  
往生故名攝生増上縁文

1 2 われ仏を得たらんにと説きたまふ。「十方衆生」とい  
ふは、十方のよろづの衆生なり、すなはちわれらな  
り。「願生我國」といふは、安樂淨刹に生れんと願  
へとなり。「稱我名字」といふは、われ仏を得んにわ  
がなをとなへられんとなり。「下至十聲」といふは、  
3 名字をとなへられんこと下十聲せんものとなり、「下  
至」といふは十聲にあまれるものも聞名のものをも  
往生にもらさずきらはぬことをあらはししめすとな  
り。「乘我願力」といふは、「乘」はのるべしといふ、  
また智なり、智といふは願力にのせたまふとしるべし  
となり、願力に乗じて安樂淨刹に生れんとするなり。  
「若不生者不取正覺」といふは、ちかひを信じたる  
人、もし本願の実報土に生れずは、仏に成らじと誓ひ  
たまへるみのりなり。「此即是願往生行人」といふ  
は、これすなはち往生を願ふ人といふ。「命欲終時」

して、ひさしくなりておはしまさんひとびとは、後世  
のあしきことをいとふしるし、この身のあしき」とを  
ぱいとひすてんとおぼしめしるしも候ふべしといそ  
おぼえ候へ。

はじめて仏のちかひをききはじめむるひとびとの、わ  
が身のわろくこころのわろきをおもひしりて、この身  
のやうにてはなんぞ往生せんずるといふひとにこそ、  
煩惱具足したる身なれば、わがこころの善惡をば沙汰  
せず、迎へたまふぞとは申し候へ。かくきてのち、  
仏を信ぜんとおもひこころふかくなりぬるには、まこ  
とにこの身をもいとひ、流転せんことをもかなしみ  
て、ふかくちかひをも信じ、阿弥陀仏をも好みまうし  
などするひとは、もとこそ、こころのままにてあし  
きことをもおもひ、あしきことをもふるまひなどせ  
しかども、いまはさやうのこころをすてんとおぼしめ

10 といふ、まつとしあこころなり。選択不思議の本願  
の尊号、無上智慧の信心をききて、一念もうたがふこ  
ころなければ眞実信心といふ。この信心をうれば、等  
正覺にいたりて補處の弥勒におなじくして無上覺を  
なるべしといへり、すなはち正定聚のくらゐにさだ  
まるなり。このゆへに信心やぶれず、かたぶかず、み  
だれぬこと金剛のごとくなり。しかれば金剛の信心と  
いふなり。\*\*これを迎といふなり。

11 \*\*(異本による)

12 \*  
(異本) 選択不思議の本願、無上智慧の尊号をき  
きて、一念もうたがふこころなきを眞実信心といふ  
なり、金剛心ともなづく。

17 「極樂無為涅槃界」といふは、「極樂」とまうすはか  
故使如來選要法 教念弥陀專復專 (法事讀)

といふは、いのちをはらんとせんときといふ。「願力  
しうりきりょく 摂得往生」といふは、大願業力摄取して往生を得し  
むといへることころなり。すでに尋常のとき信楽をえ  
たる人といふなり、臨終のときはじめて信楽決定し  
て摄取にあづかるものにはあらず。ひごろ、かの心光  
に攝護せられまゐらせたるゆゑに、金剛心をえたる  
人は定聚に住するゆゑに、臨終のときにあらず、  
かねて尋常のときよりつねに攝護して捨てたまはず。  
れば摄得往生と申すなり。このゆゑに「摄生増上  
縁」となづくるなり。またまことに尋常のときより  
信なからん人は、ひごろの称念の功によりて、最後  
のときはじめて善知識のすすめにあうて信心を  
えんとき、願力摄して往生を得るものもあるべしと  
なり。臨終の来迎をまつものは、いまだ信心をえぬ  
ものなれば、臨終をこころにかけてなげくなり。

の安樂淨土なり、よろづのたのしみつねにしてくる  
しまじはらざるなり、かのくにをば安養といへり、  
どんらんかじょう  
曇鸞和尚はほめたてまつりて安養とまうすとのたまへ  
どり。また『論』には「蓮華藏世界」ともいへり、「無  
為」ともいへり。「涅槃界」といふは、無明のまどひ  
をひるがへして無上覚をさとるなり、界はさかひと  
いふ、さとりをひらくさかひなりとするべし。涅槃と  
まうすにその名無量なり、くはしくまうすにあたは  
ず、おろおろその名をあらはすべし。涅槃をば滅度と  
いふ、無為といふ、安樂といふ、常樂といふ、実相  
といふ、法身といふ、法性といふ、真如といふ、一  
如といふ、仞性といふ、仞性すなはち如來なり。こ  
の如來微塵世界にみちみちてまします、すなはち一切  
くみな成仏すととけり。この一切有情の心に方便法  
群生海の心にみちたまへるなり、草木国土ことごと  
9 7 8 6 5 4 3 2 1

16 15 14 13 12 11 10 9 8  
 般すなはち法性なり、法性すなはち如來なり。寶海  
 と申すは、よろづの衆生をきらはず、さはりなくへ  
 だてず、みちびきたまふを、大海の水のへだてなきに  
 たとへたまへるなり。この一如宝海よりかたちをあら  
 はして、法藏菩薩となのりたまひて、無碍のちかひを  
 おこしたまふをたねとして、阿彌陀仏となりたまふが  
 ゆゑに、報身如來と申すなり。これを尽十方無碍光仏  
 となづけたてまつれるなり。この如來を南無不可思議  
 光仏とも申すなり。この如來を方便法身とは申すな  
 り。方便と申すは、かたちをあらはし、御なをしめし  
 て、衆生にしらしめたまふを申すなり。すなはち阿  
 弥陀仏なり。この如來は光明なり、光明は智慧なり、  
 智慧はひかりのかたちなり、智慧またかたちなければ  
 不可思議光仏と申すなり。この如來、十方微塵世界に  
 みちみちたまへるがゆゑに、無邊光仏と申す。しかれ

16 15 14 13 12 11 10 9 8  
 身の誓願を信樂するがゆへに、この信心すなはち仏  
 性なり、この仮性すなはち法性なり、法性すなはち  
 法身なり。しかれば仏について二種の法身ます、  
 ひとつには法性法身とまうす、ふたつには方便法身  
 とまうす。法性法身とまうすは、いろもなし、かた  
 ちもましまさず。しかればここもおよばず、ことば  
 もたえたり。この一如よりかたちをあらはして方便法  
 身とまうす、その御すがたに法藏比丘とのりたまひ  
 て不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたま  
 ふなり。この誓願のなかに、光明無量の本願、寿命  
 無量の弘誓を本としてあらはれたまへる御かたちを、  
 世親菩薩は尽十方無碍光如來となづけたてまつりたま  
 へり。この如來すなはち誓願の業因にむくひたまひて  
 報身如來とまうすなり、すなはち阿彌陀如來とまうす  
 なり。報といふはたねにむくひたるゆへなり。この報

16 15 14 13 12 11 10 9 8  
 23 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8  
 いま一乗と申すは本願なり。円融と申すは、よろ  
 づの功德善根みちみちてかくることなし、自在なるこ  
 ころなり。無碍と申すは、煩惱惡業にさへられず、や  
 ぶられぬをいふなり。真実功德と申すは名号なり。  
 一実真如の妙理、円満せるがゆゑに、大宝海にたとへ  
 たまふなり。一実真如と申すは無上大涅槃なり。涅槃

2 3 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8  
 ば、世親菩薩は尽十方無碍光如來となづけたてまつり  
 たまへり。  
 19 『淨土論』にいはく、「觀仏本願力」遇無空過者  
 能令速滿足。功德大宝海」とのたまへり。この文の  
 ころは、「仏の本願力を觀するに、まうあうてむな  
 しくすぐるひとなし、よくすみやかに功德の大宝海を  
 満足せしむ」とのたまへり。「觀」は願力をこころに  
 うかべみると申す、またしるといふことなり。「遇」  
 はまうあふといふ、まうあふと申すは本願力を信ずる  
 なり。「無」はなしといふ、「空」はむなしくといふ。  
 「過」はすぐるといふ、「者」はひとといふ。むなしく  
 すぐるひとなしといふは、信心あらんひと、むなしく  
 生死にとどまることなしとなり。「能」はよくとい  
 ふ。「令」はせしむといふ、よしといふ、「速」はすみ  
 やかにといふ、疾きことといふなり、「満」はみつと

1 (序) ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度  
海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵  
日なり。しかばすなはち淨邦縁熟して、調達、闇  
世をして逆害を興ぜしむ。淨業機彰れて、釈迦、韋  
提をして安養を選ばしめたまへり。これすなはち権  
化の仁、畜しく苦惱の群萌を救済し、世雄の悲、まさ  
しく逆説闡提を惠まんと欲す。ゆゑに知んぬ、円融

16 こうえつるのちには、この自然のことはつねに沙汰  
すべきにはあらざるなり。つねに自然を沙汰せば、義  
なきを義とすといふことは、なほ義のあるになるべ  
し。これは仏智の不思議にてあるなるべし。

顕淨土真実教行証文類

- 5 いふ、「足」はたりぬといふ。「功德」と申すは名号  
なり、「大宝海」はよろづの善根功德満ちきはまるを  
海にたとへたまふ。この功德をよく信するひとのここ  
ろのうちに、すみやかに疾く満ちたりぬとしらしめん  
となり。しかば、金剛心のひとは、しらずもとめざ  
るに、功德の大宝その身にみちみつがゆゑに大宝海と  
たとへたるなり。
- 6 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらず。この如來のちかひにてあるがゆゑに法  
爾といふ。「法爾」といふは、この如來の御ちかひな  
るがゆゑに、しからしむるを法爾といふなり。法爾は  
この御ちかひなりけるゆゑに、およそ行者はから  
ひのなきをもつて、この法の徳のゆゑにしからしむと  
たとへたるなり。
- 7 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひ  
て迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者は  
のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然と  
たとへたるなり。
- 8 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひ  
て迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者は  
のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然と  
たとへたるなり。
- 9 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひ  
て迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者は  
のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然と  
たとへたるなり。
- 10 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひ  
て迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者は  
のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然と  
たとへたるなり。
- 11 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひ  
て迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者は  
のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然と  
たとへたるなり。
- 12 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひ  
て迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者は  
のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然と  
たとへたるなり。
- 13 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひ  
て迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者は  
のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然と  
たとへたるなり。
- 14 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひ  
て迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者は  
のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然と  
たとへたるなり。
- 15 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひ  
て迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者は  
のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然と  
たとへたるなり。
- 16 「自然」といふは、もとよりしからしむるといふこ  
とばかりひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひ  
て迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者は  
のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然と  
たとへたるなり。

至徳の嘉号は悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信  
樂は疑を除き証を獲しむる眞理なりと。

しかば、凡小修し易き真教、愚鈍往き易き捷徑なり。  
大聖一代の教、この徳海にしくなし。穢を捨て  
淨を欣び、行に迷ひ信に惑ひ、心昏く識寡く、惡重  
く障多きもの、ことに如來の發遣を仰ぎ、かならず  
最勝の直道に帰して、もつぱらこの行に奉へ、ただ  
この信を崇めよ。ああ、弘誓の強縁、多生にも值ひが  
たく、真実の淨信、億劫にも獲がたし。たまたま行  
信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。もしまだこのたび疑網  
に覆蔽せられば、かへつてまた曠劫を経歴せん。誠  
なるかな、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思  
して遙慮することなかれ。

ここに愚癡釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支  
の聖典、東夏・日域の師釈に、遇ひがたくしていま

遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、ことに如來の恩徳の深きことを知んぬ。ここをもつて聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

2 (教卷一、二) つつしんで淨土真宗を案するに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

それ真実の教を顯さば、すなはち『大無量壽經』これなり。この經の大意は、弥陀、誓を超發して、広く法藏を開きて、凡小を哀れんで選んで功德の宝を施することを致す。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯ひ惠むに真実の利をもつてせんと欲すなり。ここをもつて如來の本願を説きて經の宗致とす、すなはち仏の名号をもつて經の体とするなり。

3 (行卷・標舉) 諸仏称名の願選択本願の行

4 (行卷二) つつしんで往相の回向を案するに、�行あり、大信あり。大行とはすなはち無碍光如來の名を稱するなり。この行はすなはちこれもろの善法を撰し、もろもろの德本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。ゆゑに大行と名づく。しかるにこの行は大悲の願より出でたり。すなはちこれ諸佛称揚の願と名づく、また諸仏称名の願と名づく、また諸仏咨嗟の願と名づく、また往相回向の願と名づくべし、また選択称名の願と名づくべきなり。

5 (行卷一二) しかれば名を稱するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。称名はすなはちこれ最勝真妙の正業なり。

正業はすなはちこれ念佛なり。念佛はすなはちこれ南無阿彌陀仏なり。南無阿彌陀仏はすなはちこれ正念なりと、知るべしと。

6 (行卷一五・易行品) 仏法に無量の門あり。世間の道に難あり、易あり。陸道の歩行はすなはち苦しく、水道の乗船はすなはち樂しきがごとし。菩薩の道もまたかくのことし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便の易行をもつて疾く阿惟越致に至るものあり。乃至もし人疾く不退転地に至らんと欲はば、恭敬の心をもつて執持して名号を称すべし。もし菩薩、この身において阿惟越致地に至ることを得、阿耨多羅三藐三菩提を成らんと欲はば、まさにこの十方諸仏を念ずべし。名号を称すること『宝月童子所問經』の「阿惟越致品」のなかに説くがごとしと。

7 (行卷一八・論註) つつしんで龍樹菩薩の『十住

毘婆沙』を案するにいはく、菩薩、阿毘跋致を求めるに二種の道あり。一つには難行道、二つには易行道なり。難行道とは、いはく、五濁の世、無仏の時において阿毘跋致を求むるを難とす。(中略) 易行道

とは、いはく、ただ信仏の因縁をもつて淨土に生ぜんと願す。仏願力に乗じてすなはちかの清淨の土に往生を得しむ。仏力住持してすなはち大乗正定の聚に入る。正定はすなはちこれ阿毘跋致なり。たとへば水路に船に乗じてすなはち樂しきがごとし」と。

8 (行卷一九・論註) へいかんが回向する、一切苦惱の衆生を捨てずして、心につねに作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑにとのたまへり。回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相とは、おのれが功德をもつて一切衆生に回施して、作願してともに阿彌陀

如來の安樂淨土に往生せしめたまへるなり。

貌なり。

9 (行卷二五・礼讚) たゞ念佛の衆生を觀そなはして、攝取して捨てざるがゆゑに、阿弥陀と名づく。

10 (行卷三〇・玄義分) 南無といふは、すなはちこれ帰命なり、またこれ發願回向の義なり。阿弥陀佛といふは、すなはちこれその行なり。この義をもつてのゆゑにかららず往生を得。

11 (行卷三四) 發願回向といふは、如來すでに發願して衆生の行を回向したまふの心なり。即是其行といふは、すなはち選択本願これなり。必得往生といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。『經』(大經)には「即得」といへり、『釈』(易行品)には「必定」といへり。「即」の言は願力を聞くによりて報土の真因決定する時剎の極促を光闘するなり。「必」の言は審なり、然なり、分極なり、金剛心成就の言は審なり、然なり、分極なり、金剛心成就の

ゆゑに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力といふ。ここをもつて龍樹大士は「即時入必定」(易行品)といへり。曇鸞大師は「入正定聚之數」(論註・上)といへり。仰いでこれを憑むべし。もつばらこれを行すべきなり。

14 (行卷七三) おほよそ往相回向の行信について、行にすなはち一念あり、また信に一念あり。行の一念といふは、いはく、称名の遍数について選択易行の至極を顯開す。

15 (行卷七八) しかれば大悲の願船に乗じて光明の廣海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。すなはち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵ふなり。

16 (行卷八四) 「一乗海」といふは、「一乘」は大乗なり。大乗は仏乗なり。一乗を得るは阿耨多羅三

12 (行卷六八・選択集) それすみやかに生死を離れんと欲はば、二種の勝法のなかに、しばらく聖道門を開きて、選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲はば、正・雜二行のなかに、しばらくもろもろの雜行を抛ちて、選んで正行に歸すべし。正行を修せんと欲はば、正・助二業のなかに、なほ助業を傍らにして、選んで正定をもつぱらにすべし。正定の業とはすなはちこれ仏の名を称するなり。称名はからず生ずることを得。仏の本願によるがゆゑに。

13 (行卷七一) しかれば眞実の行信を獲れば、心に歡喜多きがゆゑに、これを歡喜地と名づく。これを初果に喻ふることは、初果の聖者、なほ睡眠し懶惰なれども二十九有に至らず。いかにいはんや十方群生海、この行信に帰命すれば攝取して捨てたまはず。

藐三菩提を得るなり。阿耨菩提はすなはちこれ涅槃界なり。涅槃界はすなはちこれ究竟法身なり。究竟法身を得るはすなはち一乗を究竟するなり。異の如來ましまさず。異の法身ましまさず。如來はすなはち法身なり。一乗を究竟するはすなはちこれ無邊不斷なり。大乗は二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。一乗はすなはち第一義乗なり。ただこれ誓願一仏乗なり。

17 (行卷九二) 「海」といふは、久遠よりこのかた凡聖所修の雑修・雜善の川水を転じ、逆説闘提・恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧眞実・恒沙万徳の大宝海水と成る。これを海のごときに喻ふるなり。まことに知んぬ、『經』に説きて「煩惱の氷解けて功德の水と成る」とのたまへるがごとし。

18 (信卷・別序) それおもんみれば、信樂を獲得す

21 (信卷一三・散善義) 二者深心。深心といふは、すなはちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには、決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。二つには、決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を攝受して、疑なく慮りなくかの願力に乗じて、さだめて往生を得と信す。

22 (信卷一三・散善義) たとへば人ありて、西に向かひて行かんとするに、百千の里ならん。忽然として中路に見れば二つの河あり。一つにはこれ火の河、南にあり。二つにはこれ水の河、北にあり。二河おのの闊さ百歩、おのの深くして底なし、南北邊なし。まさしく水火の中間に一つの白道あり、闊さ四五寸ばかりなるべし。この道、東の岸より西の岸に

21 (信卷一三・散善義) 二者深心。深心といふは、

至るに、また長さ百歩、その水の波浪交はり過ぎて道を湿す。その火焔また来りて道を焼く。水火あひ交

はりて、つねにして休息することなけん。この人すでに空曠のはるかなるところに至るに、さらに人物なし。

多く群賊・悪獸ありて、この人の単独なるを見て、競ひ來りてこの人を殺さんとす。死を怖れてただ

ちに走りて西に向かふに、忽然としてこの大河を見て、すなはちみづから念言すらく、へこの河、南北に

辺畔を見す、中間に一つの白道を見る、きはめてこれ狭少なり。二つの岸あひ去ること近しいへども、

なによりてか行くべき。今日さだめて死せんこと疑はず。まさしく到り回らんと欲へば、群賊・悪獸、漸々に來り逼む。まさしく南北に避り走らんとすれ

ば、悪獸・毒虫、競ひ來りてわれに向かふ。まさしく西に向かひて道を尋ねて去かんとすれば、またおそ

20 (信卷一) つつしんで往相の回向を案するに、大信かれとなり。

19 (信卷・標榜)  
至心信樂の願 正定聚の機

ここに愚禿釈の親鸞、諸仏如來の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披閱す。廣く三經の光沢を蒙りて、ことに一心の華文を開く。しばらく疑問を至してつひに明証を出す。まことに仏恩の深重なるを念じて、人倫の瞬言を恥ぢず。淨邦を欣ふ徒衆、穢域を厭ふ庶類、取捨を加ふといへども毀謗を生ずることなかれとなり。

あり。大信心はすなはちこれ長生不死の神方、欣浄厭穢の妙術、選択回向の直心、利他深広の信樂、金剛不壞の真心、易往無人の淨信、心光攝護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海なり。この心すなはちこれ念佛往生の願より出でたり。この大願を選択本願と名づく、また本願三心の願と名づく、また至心信樂の願と名づく、また往相信心の願と名づくべきなり。しかるに常沒の凡愚、流転の群生、無上妙果の成じがたきにあらず、真実の信樂まことに獲ること難し。なにをもつてゆゑに、いまし如來の加威力によるがゆゑなり、博く大悲廣慧の力によるがゆゑなり。たまたま淨信を獲ば、この心顛倒せず、この心虛偽ならず。ここをもつて極惡深重の衆生、大慶喜心得、もうもろの聖尊の重愛を獲るなり。

の二河)といふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとし、瞋憎は火のごとしと喻ふ。(中間の白道四五寸)といふは、すなはち衆生の貪瞋煩惱のなかに、よく清淨願往生の心を生ぜしむるに喻ふ。いまし貪瞋強きによるがゆゑに、すなはち水火のごとしと喻ふ。善心、微なるがゆゑに、白道のごとしと喻ふ。また水波つねに道を湿すとは、すなはち愛心つねに起りてよく善心を染汚するに喻ふ。またへ火焰つねに道を焼くとは、すなはち瞋嫌の心よく功德の法財を焼くに喻ふ。へん、道の上を行ひて、ただちに西に向かふといふは、すなはちもろもろの行業を回してただちに西方に向かふに喻ふ。へ東の岸に人の声の勧め遣はすを聞きて、道を尋ねてただちに西に進むといふは、すなはち积迦すでに滅したまひて、後の人見たてまつらず、なほ教法ありて尋ぬべきに喻ふ、すな

らくはこの水火の二河に墮せんことを」と。時にあたりて惶怖することまたいふべからず。すなはちみづから思念すらく、<へわれいま回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を勉めざれば、われ寧くこの道を尋ねて前に向かひて去かん。すでにこの道あり、かならず可度すべしと。この念をなすとき、東の岸にたちまちに人の勧むる声を聞く、へきみただ決定してこの道を尋ねて行け。かならず死の難なげん。もし住らばすなはち死せん」と。また西の岸の上に、人ありて喚ばひていはく、<へなんぢ一心に正念にしてただちに来れ、われよくなんぢを護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」と。この人、すでにここに遣はし、かしこに喚ばふを聞きて、すなはちみづからまさしく身心に当たり、決定して道を尋ねてただちに進んで、疑怯退

心を生ぜずして、あるいは行くこと一分二分するに、東の岸の群賊等喚ばひていはく、へきみ回り來れ。この道嶮惡なり。過ぐることを得じ。かならず死せんことなりと疑はず。われらすべて恶心あつてあひ向かふことなしと。このひと、喚ばふ声を聞くといへども、またかへりみず、一心にただちに進んで道を念じて行けば、須臾にすなはち西の岸に到りて、永くもろもろの難を離る。善友あひ見て慶樂すること已むことなからんがごとし。これはこれ喚へなり。

次に喚へを合せば、<へ東の岸)といふは、すなはちこの婆娑の火宅に喻ふ。<へ西の岸)といふは、すなはち極楽宝国に喻ふ。<へ群賊・悪獸詐り親しむ)といふは、すなはち衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喻ふ。<へ無人空廻の沢)といふは、すなはちつねに悪友に隨ひて真の善知識に値はざるに喻ふ。<へ水火

はちこれを声のごとしと喻ふるなり。へあるいは行くこと一分二分するに群賊等喚び回す)といふは、すなはち別解・別行・悪見の人等、妄りに見解をもつてたがひにあひ惑乱し、およびみづから罪を造りて退失すと説くに喻ふるなり。<へ西の岸の上に人ありて喚ばふ)といふは、すなはち弥陀の願意に喻ふ。<へ須臾に西の岸に到りて善友あひ見て喜ぶ)といふは、すなはち衆生久しう生死に沈みて、曠劫より輪廻し、迷倒してみづから縹ひて、解脱するに由なし。仰いで釈迦はげん發遣して、指へて西方に向かへたまふことを蒙り、また弥陀の悲心招喚したまふによつて、いま二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に遺るることなく、かの願力の道に乗じて、捨命以後かの國に生することを得て、仏とあひ見て慶喜すること、なんぞ極まらんと喻ふるなり。

28

(信卷七三) 横超断四流といふは、横超とは、横に入る益なり。

23 (信卷一八) しかれば、もしは行、もしは信、一事として阿弥陀如來の清淨願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと、知るべし。

24 (信卷二二) また問ふ。字訓のごとき、論主の意、三をもつて一とせる義、その理しかるべきといへども、愚惡の衆生のために阿弥陀如來すでに三心の願を發したまへり。いかんが思念せんや。

答ふ。仏意測りがたし。しかりといへども、ひそかにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心なし、虛偽詔偽にして眞実の心なし。ここをもつて如來、一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひしき、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざることなし、真心

ならざることなし。如來、清淨の真心をもつて、円融無碍不可思議不可稱不可説の至徳を成就したまへり。如來の至心をもつて、諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に回施したまへり。すなはちこれ利他の真心を彰す。ゆゑに疑蓋雜はることなし。この至心はすなはちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。

25 (信卷四六) まことに知んぬ、二河の譬喻のなかに「白道四五寸」といふは、白道とは、白の言は黒に対するなり。白はすなはちこれ選択攝取の白業、往相回向の淨業なり。黒はすなはちこれ無明煩惱の黒業、二乘・人・天の雜善なり。道の言は路に対せるなり。道はすなはちこれ本願一実の直道・大般涅槃、無上の大道なり。路はすなはちこれ二乘・三乘、万善諸行の小路なり。四五寸といふは衆生の四大五陰に喻ふるなり。「能生清淨願心」といふは、金剛の真心を

獲得するなり。本願力の回向の大信心海なるがゆゑに、破壊すべからず。これを金剛のごとしと喚ふるなり。

26 (信卷六〇) それ眞実の信楽を案ずるに、信楽に一念あり。一念とはこれ信楽開発の時刻の極促を顯し、広大難思の慶心を彰すなり。

27 (信卷六五) 金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超えて、かならず現生に十種の益を獲。なものか十とする。一つには冥衆護持の益、二つには至徳具足の益、三つには転惡成善の益、四つには諸仏護念の益、五つには諸仏称讚の益、六つには心光常護の益、七つには心多歡喜の益、八つには知恩報徳の益、九つには常行大悲の益、十には正定聚に入れる益なり。

28 (信卷一〇三) 横超断四流といふは、横超とは、横に入る益なり。

29 (信卷八四) 真の仏弟子といふは、眞の言は偽に対し仮に対するなり。弟子とは釈迦諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり。この信行によりてかならず大涅槃を超証すべきがゆゑに、眞の仏弟子といふ。

30 (信卷一〇三) まことに知んぬ、弥勒大士は等覚の金剛心を窮むるがゆゑに、竜華三会の曉、まさに無上覺位を極むべし。念佛の衆生は横超の金剛心を窮む

むるがゆゑに、臨終一念の夕べ、大般涅槃を超証す。ゆゑに便同といふなり。しかのみならず金剛心を獲るものは、すなはち韋提と等しく、すなはち喜・悟・信の忍を得すべし。これすなはち往相回向の真心徹到するがゆゑに、不可思議の本誓によるがゆゑなり。

31 (信卷一〇六) 仮といふは、すなはちこれ聖道の諸機、淨土の定散の機なり。

32 (信卷一一〇) 偽といふは、すなはち六十二見・九十五種の邪道これなり。

33 (信卷一一三) まことに知んぬ。悲しきかな禿鷲、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥づべし傷むべしと。

34 (信卷一一四) それ仏、難治の機を説きて、『涅槃

經』にのたまはく、「迦葉世に三人あり、その病治しがたし。一つには誇大乗、二つには五逆罪、三つには一闡提なり。かくのごときの三病、世のなかに極重なり。ことごとく声聞・縁覚・菩薩のよく治すところにあらず。善男子、たとへば病あればかならず死するに、治することながらんに、もし暗病隨意の医薬ながらんがごとし。もし暗病隨意の医薬ながらん、かくのごときの病、さだめて治すべからず。まさに知るべし、この人かならず死せんこと疑はずと。善男子、この三種の人またかくのことし。仏・菩薩從ひて聞治を得をはりて、すなはちよく阿耨多羅三藐三菩提心を發せん。もし声聞・縁覚・菩薩ありて、あるいは法を説き、あるいは法を説かざるあらん、それをして阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむることあたはず」と。

35 (信卷一一八) ここをもつて、いま大聖の真説によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓を憑み、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治す、これを憐憫して療したまふ。たとへば醍醐の妙薬の、一切の病を療するがごとし。濁世の庶類、穢惡の群生、金剛不壞の真心を求念すべし。本願醍醐の妙薬を執持すべきなりと、知るべし。

36 (証卷二) つつしんで眞実の証を顯さば、すなはちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり。すなはちこれ必至滅度の願より出でたり。また証大涅槃の願と名づくるなり。しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のときに大乗正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆゑに、かならず滅度に至る。かならず滅度に至るはすなはちこれ常樂なり。常樂はすなはちこれ畢竟寂

滅なり。寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなはちこれ無為法身なり。無為法身はすなはちこれ実相なり。実相はすなはちこれ法性なり。法性はすなはちこれ真如なり。真如はすなはちこれ一如なり。しかれば弥陀如來は如より來生して、報・応・化・種々の身を示し現じたまふなり。

37 (証卷七・論註) 『經』にのたまはく、「もし人たしかの國土の清淨安樂なるを聞きて、剋念して生ぜんと願ぜんものと、また往生を得るものとは、すなはち正定聚に入る」と。これはこれ國土の名字仏事をなす。いづくんぞ思議すべきやと。

38 (証卷九・論註) 『論』にいはく、「へ莊嚴清淨功德成就とは、『偈』に、『觀彼世界相勝過三界道』といへるがゆゑに」(淨土論)と。これいかんぞ不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの淨土

に生ずることを得れば、三界の羣衆、畢竟して牽か  
ず。すなはちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得。いつ  
くんぞ思議すべきや」と。

39 (証卷一三) それ真宗の教行信証を案すれば、  
如來の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もし  
は果、一事として阿弥陀如來の清淨願心の回向成  
就したまへるところにあらざることあることなし。因、  
じようなるがゆゑに果また淨なり。

40 (証卷一五・淨土論) 出第五門とは、大慈悲をもつ  
て一切苦惱の衆生を觀察して、應化の身を示す。生  
死の圓、煩惱の林のなかに回入して、神通に遊戯して  
教化地に至る。本願力の回向をもつてゆゑに。こ  
れを出第五門と名づく。

41 (証卷一六・論註) 還相とは、かの土に生じをはり  
て、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、  
生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、とも  
に仏道に向かへしむるなり。もしは往、もしは還、み  
るに、(回向を首として大悲心を成就することを得た  
まへるがゆゑに) (淨土論)とのたまへり。

42 (証卷一七・論註) 上の國土の莊嚴十七句と、如  
來の莊嚴八句と、菩薩の莊嚴四句とを廣とす。入一  
法句は略とす。なんがゆゑを廣略相入を示現すると  
ならば、諸仏菩薩に二種の法身あり。一つには法性  
法身、二つには方便法身なり。法性法身によりて方  
便法身を生ず。方便法身によりて法性法身を出す。  
この二の法身は異にして分つべからず。一にして同じ  
かるべからず。このゆゑに廣略相入して、統ぬるに  
法の名をもつてす。菩薩、もし廣略相入を知られ  
ば、すなはち自利利他するにあたはず。